

黙示録17章「獣の上にいる大淫婦」

1A 地の王たちの淫乱 1-6

1B 淫行のぶどう酒 1-2

2B 緋色の獣 3-4

3B 大バビロン 5-6

2A 秘められた意味 7-18

1B すでに知られたもの 7

2B 七つの頭と十本の角を持つ獣 8-13

1C 昔おり、今はいない者 8

2C 七つの山、七人の王 9-11

3C 十本の角 12-14

3B この女 15-18

1C 淫婦の座す大水 15

2C 淫婦を食らい焼き尽くす獣 16-17

3C 王たちを支配する大きな都 18

本文

黙示録 17 章を開いてください。私たちは、これから、秘められた名とも呼ばれる、大淫婦バビロンについて見ていきます。神のご計画の中で、それを阻もうとする悪の勢力があることを、私たちは、いやというほど黙示録の中で見えています。その中で、世の始まりから終わりまで、人々を酔わせ、だまし、まことの信仰者を迫害してきた存在が、主の来られる前に滅ぼされる姿を見ます。この女は誰なのか、そしてこの女の影響力が、世界のすべての人々に深く浸透していることを学んでいきます。

1A 地の王たちの淫乱 1-6

1B 淫行のぶどう酒 1-2

¹ また、七つの鉢を持つ七人の御使いの一人が来て、私に語りかけた。「ここに来なさい。大水の上座している大淫婦に対するさばきを見せましょう。」

私たちは前回、神の最後の災いである、七つの鉢の災いを見ました。その最後、第七の鉢がぶちまけられると、これまでにない大地震が起こりましたが、その時にバビロンが倒壊する姿を見ました。「16:19 あの大きな都は三つの部分に裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。神は大バビロンを忘れず、ご自分の激しい憤りのぶどう酒の杯を与えられた。」このようにして、主がこの都を倒されます。その倒壊について、詳細にバビロンについて明かしているのが、17 章と 18 章です。

この大淫婦は、「大水」の上に座しています。大水とは、15 節に「あなたが見た水、淫婦が座しているところは、もろもろの民族、群衆、国民、言語です。」とあります。つまり、すべての人々に影響を与えているということです。ですから、私たち日本にも影響を与えているものです。

² 地の王たちは、この女と淫らなことを行い、地に住む人々は、この女の淫行のぶどう酒に酔いました。」

この淫婦が相手にしている客は、「地の王たち」です。王たちが女と淫行を働いているので、その国々にいる人々も、その影響下にいるのです。だから、「地に住む人々は、この女の淫行のぶどう酒に酔いました」とあります。

アジアの七つの教会の一つ、ティアティラの教会で起こったことを思い出してください。「2:20-22 けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは、あの女、イゼベルをなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている。21 わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は淫らな行いを悔い改めようとしない。22 見よ、わたしはこの女を病の床に投げ込む。また、この女と姦淫を行う者たちも、この女の行いを離れて悔い改めないなら、大きな患難の中に投げ込む。」

ティアティラの町では、商人たちの組合がありました。その集まりには、異教の儀式があり、忌まわしい性的な乱れもありました。キリスト者として、これらのものを避けなければいけません。そうすると、商売ができなくなってしまう。スミルナにある教会は、こうした経済的な圧迫や迫害があっても、貧しくなるほうを選びました。しかし、このイゼベルという女は、こういうことをしてもよいとしたのです。教会においても、主のしもべたちに、食卓につき、偶像にも肉を献げ、淫らなことをさせていたのです。それに対して、主が裁かれます。悔い改めようとしない者は、「大きな患難の中に投げ込む」と言われましたね。これが、まさにここの姿です。背教した教会は、バビロンの一部になっていきます。

しばしば、宗教ほど怖いものはないという拒否感が、日本人たちにあります。これは、ある程度、当たっていると言えるでしょう。宗教が、富や政治権力と結びつくほど、やっかいなことはありません。キリスト教の歴史が、まさにその悪い例を残しています。ローマ帝国において、イエスを信じる者たちは、初めはユダヤ人から迫害を受け、次にローマ帝国から迫害を受けました。けれども、少しずつキリスト者が増えていきました。ついに、皇帝コンスタンティヌスがキリスト教を公認しました。後に、キリスト教がローマの国教となります。

すると、ローマにあった異教の慣わしが、そのままキリスト教化されていました。その典型例がクリスマスです。ローマの豊穡の神を祭る「サトゥルナリア祭」が冬至に行われていました。また、

12月25日は、太陽神ミトラスの誕生日でした。太陽の日が長くなるので、太陽神の生まれ変わりとしてさされていたのです。サトゥルナリア祭では、人々は酔いしれてばかり騒ぎをします。性的な乱れも伴います。キリスト者が少ない日本でもクリスマスは祝われて、まさに、人々が忘年会のごとく騒いだり、また若い男女はラブホテルに行くなど、乱れていますね。

そして教会が国家権力と結びついたことによって、すべての人がキリスト教徒に無理やりさせられました。もしそうでないという者なら、かえって迫害されました。迫害される者たちが、迫害する者たちへとなっていったのです。そして、宗教改革の時には、数多くの信仰者が、カトリック教会という絶大な権力によって迫害され、殉教していきました。日本において、キリスト教は禁教とされ、キリシタンは苛烈な迫害を受けましたが、為政者には尤もな理由があったのです。それは、植民地を広げるポルトガルやスペインが、宣教師たちを通してその覇権を拡大していたからです。

そして教会には、莫大な富が集まりました。トルコでローマ時代の遺跡を見た時に、ローマ皇帝を祭る宮がありましたが、そこは財宝を預かる金庫のような働きもしていました。なぜなら、盗人でも、宮から盗んだら罰が当たると思っているからです。けれども、そうやって宮に莫大な富が集まるのです。その影響を受けたのが、エルサレムの神殿でした。サドカイ派の祭司の一家が、そうやって人々の献金を集めて、富を築いていました。それでイエスは、宮清めをされたのです。キリスト教会にも、巨大な富が集まってきました。

神と人との関係というのが、夫と妻の関係に聖書では喩えられます。事実、神が人を造られた時に、ご自身に似せて造られ、男から女を造られました。ここにまことの信仰心が育てば、そこには誠実さや正義など、あらゆる善が出てきます。富や権力によって信仰心が利用されると、人々を欲の中で溺れさせ、また弱き人々を虐げる急先鋒となってしまうのです。前者が、清純な花嫁、夫を愛し、夫に従う妻として喩えられるのに対して、後者が、王たちと淫行を働く淫婦になるのです。

2B 緋色の獣 3-4

³ それから、御使いは私を御霊によって荒野へ連れて行った。私は、一人の女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神を冒瀆する名で満ちていて、七つの頭と十本の角を持っていた。

「荒野」に連れて行かれています。ちょうど、これはイエスが御霊に導かれて、ユダの荒野に導かれ、そこで四十日の断食後に悪魔から誘惑を受けられたことを思い出します。また「荒野」は、主の中にある憩いの水際とは対照的です。主は、水を飲むことができる場所に私たちを導きますが、この女がいるところは荒野、すなわちどんなに求めても渇くしかない状態です。

そしてその女が、「緋色の獣」に乗っています。なぜ、「緋色」なのか？それは血を流す色であります。後で、聖徒たちの血を飲んでる女の姿があり、それによって獣の背に血が滴り落ちている

のでしょうか。

または、豪華な姿を示しているのかもしれませんが。罪を犯しているエルサレムに対して、主がこう語られています。「エレ 4:30 踏みにじられた女よ、あなたはいったい何をしているのか。緋の衣をまとい、金の飾りで身を飾りたて、目を塗って大きく見せたりして。美しく見せても無駄だ。恋人たちはあなたを嫌い、あなたのいのちを取ろうとしている。」キリスト教が、コンスタンティノープルでローマ帝国の国教となりましたが、東ローマ帝国の指導者たちは、この緋色の衣を着ました。豪華さを表すからです。

獣は、あの 13 章に出て来た反キリストの姿です。「13:1 また私は、海から一頭の獣が上って来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々な名があった。」獣は、政治権力者であります。その権力の上に、女が座っているのです。先ほど話したように、国々の権力と、とてつもない富の上に居座っている宗教の姿です。



後で詳しく話しますが、この獣はかつてのローマが、復興するようなかたちで現れます。そこで今の欧州を見ますと、欧州連合 EU があります。そしてバチカン、カトリック教会の総本山があります。どちらも怪しい動きを持っています。欧州連合の発行する硬貨には、なんと、獣に乗っている女を刻んでいるものがあります。また、欧州連合

の議会の建物は、建設途中で中断した、バベルの塔の形になっています。そして、同じく獣の上に乗る女の彫刻があります。どうして、よりによって、彼らは自分たちがこの獣の国を目指していることを表しているのでしょうか？それから、今の教皇フランシスは、しきりにいろいろな宗教が、神につながっているという話をします。このバビロンと獣の動きは、欧州に限らず世界全体の中に流れているものでありますが、それでも中心的になっていく欧州では、この動きが顕著です。

⁴ その女は紫と緋色の衣をまとい、金と宝石と真珠で身を飾り、忌まわしいものと、自らの淫行の汚れで満ちた金の杯を手を持っていた。

女は緋色だけでなく、紫色の衣を着ています。紫色は王権を示しますから、女王気取りです。そして、「金と宝石と真珠」で身を飾っています。多くの富があります。

そして、「金の杯」を手に持っていますが、そこには、「忌まわしいものと、自らの淫行の汚れで満ちた」になっているとあります。これはエレミヤの預言の、バビロンについてのところから来ているものです。「エレミヤ 51:7 バビロンは【主】の手にある金の杯。すべての国々はこれに酔い、国々はそのぶどう酒を飲む。それゆえ、国々は正気を失う。」

3B 大バビロン 5-6

⁵ その額には、意味の秘められた名、「大バビロン、淫婦たちと地上の忌まわしいものの母」という名が記されていた。

女は秘められた名が額に記されています、それが、「大バビロン、淫婦たちと地上の忌まわしいものの母」というものです。ここ「秘められた」というのは、奥義とも訳して良い言葉であり、「これまで隠されていたけれども、今、明らかにされる」という意味合いがあります。創世記の初めから現れて、歴史の中でバビロンという国でも現れました。そして教会も、ティアティラの教会のように、背教する時にも働いています。そして終わりの日に、このように明らかに現れる存在です。

そして、彼女が「母」と呼ばれていますね。エバが、「生きるもののすべての母」ということで、彼女の名前になりました(創世 3:20)。彼女がいなければ、私たちは存在していません。それが、母という言葉に含まれています。大バビロンは、淫婦たちと忌まわしいもののすべての元になっている存在で、すべてに影響を与えているのです。

⁶ 私は、この女が聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見て、非常に驚いた。

これは実に恐ろしい姿です。女は、本当にイエスを信じて、従っている人々をことごとく殺していきます。そして、その血に酔いしれています。偽りの宗教は、真実な信仰を迫害するのです。

映画「沈黙」において、主人公の宣教師が、自分が意固地になって信仰を棄てないために、日本人のクリシタンたちに対する拷問が厳しくなっていくのを彼は見ます。こうやって、あなたは自分の信仰のために、他の人に迷惑をかけているのだと圧力をかけられます。それで、屈するのです。では、仲間のクリシタンのためになったのでしょうか？いいえ、その反対です。彼は、他の信仰者の迷惑になりたくないと思って、棄教しましたが、その後、彼は、クリシタン取り締まりのための急先鋒に立たされるのです。実は、主人公も含めて、直接、クリシタンを取り締まっている人々は、実は、転んだクリシタン、棄教した人たちだったのです。自分がかつて信じているので、どうやった

ら落とせるかを、よく心得ているからです。

つまり、世に妥協した者は、妥協しない信仰者を迫害していくのだということです。パウロは、イシュマエルがイサクをいじめたことを取り上げて、こう言いました。「ガラテヤ 4:29 肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害したように、今もそのとおりになっています。」今、カトリックの中での棄教の話をしました。日本のプロテスタントの教会は、戦時中、キリストの再臨を信じていることで嫌疑にかけられた、教会指導者たちのことを、「日本当局は、よくやってくれた」としました。そして自分たちは、神社参拝に行ったのです。清純な花嫁なのか、姦淫をしている女になるのか？の違いなのです。

2A 秘められた意味 7-18

そして、次から御使いがヨハネに、この幻についての意味を説明していきます。

1B すでに知られたもの 7

⁷すると、御使いは私に言った。「なぜ驚くのですか。私は、この女の秘められた意味と、この女を乗せている、七つの頭と十本の角を持つ獣の秘められた意味を、あなたに話しましょう。」

御使いが、「なぜ驚くのですか。」と言って、ヨハネが驚いていることに驚いています。御使いたちにとっては、バビロンの存在というのは世々に渡って知られていました。これまで説明したとおりです。そして預言者たちも預言していました。エレミヤは、バビロンによってエルサレムが破壊される時にいた預言者なので、バビロンについて数多く預言しました。

また、ゼカリヤは、興味深い幻を神から受け取っています。5章5節から11節です。

「私と話していた御使いが出て来て、私に言った。「目を上げて、この出て行く物が何かを見よ。」6 私が「これは何ですか」と尋ねると、彼は言った。「これは、出て行くエパ升だ。」さらに言った。「これは、全地にある彼らの目だ。」7 見よ。鉛のふたが持ち上げられると、エパ升の中に一人の女が座っていた。8 彼は、「これは邪悪そのものだ」と言って、その女をエパ升の中に閉じ込め、エパ升の口の上に鉛の重しを置いた。9 それから、私が目を上げて見ると、なんと、二人の女が出て来た。その翼は風をはらんでいた。彼女たちには、このとりの翼のような翼があり、あのエパ升を地と天の間に持ち上げた。10 私は、私と話していた御使いに尋ねた。「この人たちは、エパ升をどこへ持って行くのですか。」11 彼は私に言った。「シアルの地に、あの女のために神殿を建てるためだ。それが整うと、そこの台の上にその升を置くのだ。」」

エパ枡が出てきますが、18章においてバビロンが巨大な富を蓄える存在として登場します。そして罪悪だと呼ばれる女ですが、淫婦のことです。それから、鶴(このとりの)のような翼を持っていま

すが、これは神に仕える天使ではなく、反逆する手下の墮落した天使たちのことです。そしてこれが、シヌアルに神殿、偽りの宗教を安置されるということです。バビロンのことです。

2B 七つの頭と十本の角を持つ獣 8-13

御使いは、バビロンと獣について、まず獣についての意味を説明します。13章から、いや12章において、竜が七つの頭と十の角を持っていたので、そこから現れていましたね。この意味がとても気になっていたと思います。御使いがじっくりと説明します。

1C 昔おり、今はいない者 8

^{8a} あなたが見た獣は、昔はいたが、今はいません。やがて底知れぬ所から上って来ますが、滅びることになります。

ここで言っていることを結論から言いますと、こうなります。「昔ギリシアにおいて、荒らす忌まわしい者、アンティオコス・エピファネスが現れた。しかし、今はいない。けれども、彼が予め示していた、終わりの日の荒らす忌まわしい者が、底知れる所から現れる。」

昔についてですが、ダニエルの預言のことを思い出しましょう。8章にて、ギリシアから王が現れて、神殿に荒らす忌まわしいものを据えることを預言していました。「8:10-12 それは大きくなって天の軍勢に達し、天の軍勢と星のいくつかを地に落として、これを踏みつけ、11軍の長に並ぶほどになり、彼から常供のささげ物を取り上げた。こうして、その聖所の基はくつがえされた。12背きの行いにより、軍勢は常供のささげ物とともにその角に引き渡された。その角は真理を地に投げ捨て、事を行って成功した。」

そして、この荒らす忌まわしい者は、ヨハネがいる時にはまだ出て来ていません。けれども、やがて底知れぬ所から現れるのです。11章で、二人の証人を殺したのは彼ですが、こう書いてあります。「11:7 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。」けれども、滅びることになります。この人物についてダニエルが預言する時、主が必ず、彼が荒らすのは定められている時だけであり、その後は滅びが定められていることが書かれています。ここに希望があります。

^{8b} 地に住む者たちで、世界の基が据えられたときからの書の書に名が書き記されていない者たちは、その獣が昔はいたが今はおらず、やがて現れるのを見て驚くでしょう。

13章において、地上に住んでいる者たちが、彼がよみがえったかのように現れたのを見て、驚いている姿が出てきます(3-4節)。その時に、獣を拝まない者たちがいて、その者たちは剣で殺されると預言されています。殺されるのに、それでも拝まないかと言うと、13章8節には「**地に住む**

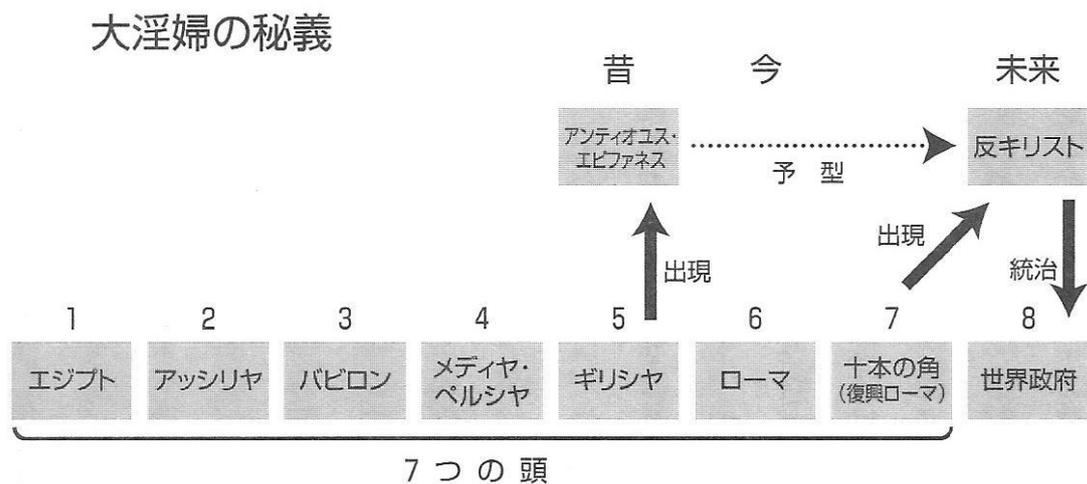
者たちで、世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されていない者はみな、この獣を拜むようになる。」とあります。世界の基が据えられた時から、主がいのちの書に名を書き記しておられます。その定めがあるので、獣が現れても驚くことなく、殺されても信仰を棄てないという耐え忍びができるのです。

2C 七つの山、七人の王 9-11

⁹ここに、知恵のある考え方が必要です。七つの頭とは、この女が座している七つの山で、それは七人の王たちのことです。¹⁰五人はすでに倒れましたが、一人は今いて、もう一人はまだ来ていません。彼が来れば、しばらくとどまるはずです。

御使いは、知恵が必要だと強調しています。七つの山だということですが、これは七人の王だということです。一つの解釈として、ローマの七つの山のことであるという人たちがいます。後で、この女が大きな都だという解き明かしが出てきます。確かに、当時、黙示録を読んだ人々にとって、大きな都と言えばローマのことであり、ペテロ第一にも、おそらくはローマのことを指して、「バビロン」と言っている箇所があります(5:13)。そして歴史的に、ローマは七つの丘で都の基礎が築かれたと言われていました。「ローマの七丘(しちきゅう)」と呼ばれています。

けれども、13章に出てくる獣の姿は、ローマだけではない、歴代の帝国の姿を呈していました。「13:2 私が見たその獣は豹に似ていて、足は熊の足のよう、口は獅子の口のようであった。竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。」豹といえば、ダニエル7章と8章から、ギリシアであることが分かります。熊は、7章からメディア・ペルシアのことです。獅子は、バビロンのことです。イスラエルを踏みにじった、これら世界帝国の姿がすべて入ってきています。



これは、イスラエルを取り巻く、歴史に現れた諸々の大国の姿を表していると言えます。七人のうち、「五人はすでに倒れました」とあります。初めに、イスラエルの前に現れたのはエジプトです。

¹ 「聖書預言の旅」明石清正著 リバイバル新聞社 262頁

創世記 10 章には、ミツライムという名で出てきます。クシュの子孫です。そして、アブラハムの生涯で、エジプトは誘惑となりました。イシュマエルが、エジプト人ハガルから生まれました。そして出エジプト記があります。次に、アッシリアです。アッシリアは、同じく創世記 10 章に、ニムロデがバベルの町を建てた後に、アッシュルに進出したとあり、その時に初めに現れます。そして、後にアッシリア帝国となり、北のイスラエル王国はアッシリアに捕え移されました。そして、知ってのとおり、その後はバビロン、ペルシア、ギリシアです。これで五人の王です。

そして、「一人は今いて」とありますが、これはまぎれもなく、ローマのことです。けれども、「もう一人はまだ来ていません。彼が来れば、しばらくとどまるはずです。」とあります。これが、これから現れる、復興ローマとも呼ぶことのできる存在です。

¹¹ また、昔はいたが今はいないあの獣は八番目の王ですが、七人のうちの一人でもあり、滅びることになります。

先に話した、アンティオコス・エピファネスを原型とする獣ですが、彼は、「八番目の王ですが、七人のうちの一人でもあり」ということです。これは復興ローマから彼が現れて、それで彼がすべてを牛耳る、獣の国を立てるということです。

3C 十本の角 12-14

¹² あなたが見た十本の角は十人の王たちです。彼らはまだ王権を受けていませんが、獣とともに、一時だけ王としての権威を受けます。¹³ これらの王たちは一つ思いとなり、自分たちの力と権威をその獣に委ねます。

七つの頭については、歴史的な流れでした。エジプト、アッシリア、バビロン、ペルシヤ、ギリシア、ローマ、復興ローマです。そして八番目が、全ての秩序を覆す獣の国になります。けれども十本の角については、その七つの頭の七つ目のところ、復興ローマの部分です。十人の王ですが、世界に拡がる十の連合体であります。十の連合体なので、そんな国と呼べるものではないのです。けれども、王のような権威は受けています。けれども、そこから獣以外の王たちが、心を一つにして獣に権威を与えるのです。

ダニエル書 7 章では、こころを詳しく話しています。「7:23-25 彼はこう言った。『第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らの後に、もう一人の王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを悩ませます。彼は時と法則を変えようとする。聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手にも委ねられる。』獣は十人の王のうち、三つを倒して、その三つの部分を自分の支配権とします。それから、

残りの七人が彼に権威を委譲します。ですから、十人のうちの一人ではなく、十の連合体のうち、彼がどこからともなく表れて、そのうちの三つを彼が掌握します。それから他の七つが平和裏に権威が移行するのです。二段階を踏んでいます。

私たちは、ローマから復興ローマがあって、それから獣の国なるという話を聞くと、なんだかよく分からないかもしれません。けれども、世界の歴史を見れば、ローマの影響力というのは絶大で、今の日本にも影響を与えている空前絶後の存在と言ってよいです。ダニエルは、2章にて、ネブカドネツアルの見た夢を解き明かしました。人の像です。すねと足がありますね。すねは鉄で、足の一部が鉄、一部が粘土なのです。そしてもちろん、その後に足の指が十本あります。これが、まさにローマの歴史を示しています。

ローマ帝国は、紀元前 27 年から始まりました。新約聖書はすべて、このローマの時代に起こり、イエスが世に来られ、使徒たちが福音を宣べ伝えたのもローマ時代です。ローマというとイタリアにあり、教会もローマ・カトリックだけだと思うでしょう。いいえ、違うのです。キリスト教徒になったローマ皇帝は、都をローマから、今のトルコのイスタンブールに移しました。コンスタンティノープルと呼びます。ローマは異教の影響が強いので、キリスト教によって国づくりを新たに始めるためです。そして、テオドシウス帝の時にキリスト教を国教としましたが、彼の死後、息子によって東西が分裂しました。西ローマ帝国と東ローマ帝国です。東ローマ帝国は、ビザンチン帝国とも呼ばれます。そのキリスト教は、カトリックではなくギリシア正教と呼ばれます。正教会です。西ローマは、476年に滅びました。けれども、ビザンチン帝国はなんと、1453年まで続くのです。実に、一千年紀以上つづいた帝国です。

そして、その後の欧州とトルコやロシアには、ローマの影響が色濃く残ります。欧州は、例えば、ドイツを中心にして、神聖ローマ帝国が君臨しました。ビザンチン帝国は、滅んだ後もイスラムの帝国である、オスマン・トルコにおいてもその影響は残っていきます。そして、ロシアは、ビザンチン帝国が滅んだ後に、自分たちがその後継者だと自負して、ロシア正教による帝国を築き、自らを「第三のローマ」と称します。今の欧州、米国、またロシアに行けば、どれだけかつて栄華を誇ったローマ帝国を意識しているかが分かります。ワシントン DC にある建造物や碑は、ギリシアとローマ時代に模したものがたくさんあります。鷲も象徴で多用されますね。それもローマからのものです。法体系や軍事も、ローマから来たものがかなり多いです。

そこで、改めてダニエル 2 章を読みますと、鉄と粘土が混じった足についてが、まさに今に至る状況であることが分かるのです。「2:43 鉄と粘土が混じり合っているのをあなたをご覧になったように、それらは子孫の間で互いに混じり合うでしょう。しかし鉄が粘土と混じり合わないように、それらが互いに団結することはありません。」今の欧米とロシアが、ウクライナを巡って、言い争っています。そして、日本を含む他の世界が、そのことで振り回されています。このようなグローバル

化した状態が、まさに2章43節に預言されていることです。

この延長で、足の指が十本あるように、十の王が世界を統治する姿が現れるのです。そして、獣、反キリストがそこから現れて、すべてが彼に権力を委譲し、それで獣の国となります。

14 彼らは子羊に戦いを挑みますが、子羊は彼らに打ち勝ちます。子羊は主の主、王の王だからです。子羊とともにいる者たちは、召されて選ばれた忠実な者たちです。」

これは、16章のハルマゲドンの戦いのことです。王たちが獣を筆頭にして一つになっています。そして、神とキリストに対して戦いを挑みます。19章によれば、イエスは白い馬に乗っておられ、口から出て来る剣によって彼らに打ち勝たれます。王の王として、主の主として来られます。

そして、子羊と共に帰って来る者たちがいます。これも聖書を通じて、預言されています。ゼカリヤ書には、「私の神、【主】が来られる。すべての聖なる者たちも、主とともに来る。(14:5)」とあります。天に引き上げられるキリスト者たちは、天においてキリストの権威が与えられ、キリストが地上に戻られる時に、栄光の姿をもって戻ってくるのです。「コロサイ 3:4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」

そして、大切な励まし、慰めの言葉があります。「子羊とともにいる者たちは、召されて選ばれた忠実な者たちです」であります。この三つは、聖書全体の中で何度も何度も、主がご自分の民に教えられていることです。選ばれており、召し出され、そして、主に忠実に仕えるということです。「ローマ 8:30 神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。」主は予め、キリストのように栄光を表す者として決めてくださいました。そしてこの地上において、私たちがあらゆる努力をして、召された事、選ばれたことを確かなものとしていきます。「2ペテロ 1:10 ですから、兄弟たち。自分たちの召しと選びを確かなものとするように、いっそう励みなさい。これらのことを行っているなら、決してつまずくことはありません。」

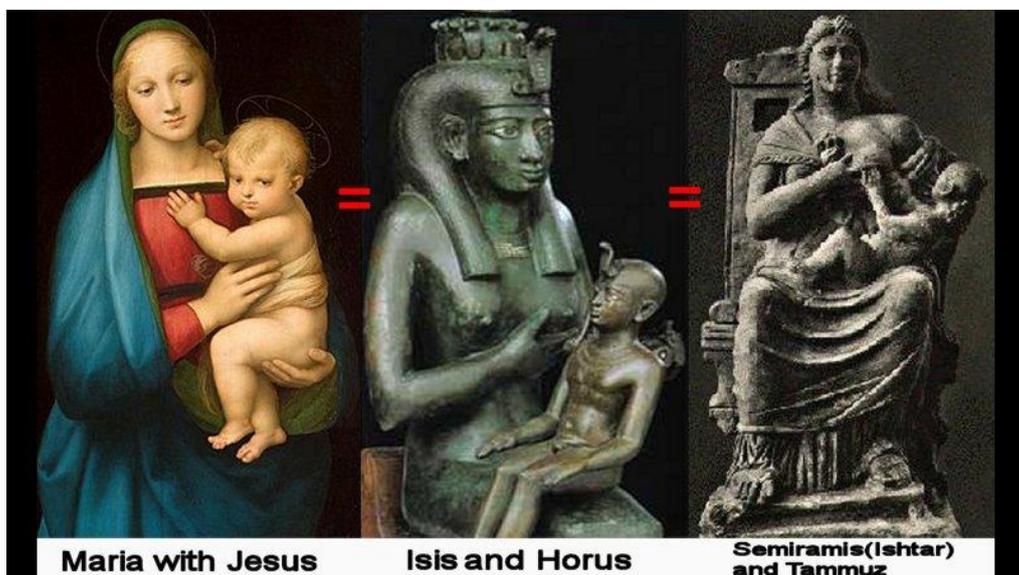
3B この女 15-18

1C 淫婦の座す大水 15

15 また、御使いは私に言った。「あなたが見た水、淫婦が座しているところは、もろもろの民族、群衆、国民、言語です。

ここから大淫婦の秘められた意味です。大淫婦が、「大水の上」に座っていたことを思い出してください(1節)。その座っていたのは、ここにあるように、「もろもろの民族、群衆、国民、言語」です。バビロンの影響が、このように広がっているのです。

先ほど、富と権力が信仰心につながった話をしました。宗教においても、バビロン神話の影響をいたるところで見ます。バビロンには、イシュタルという女神がいます。その息子がタンムズです。エレミヤやエゼキエルの時代、イスラエルでは、このバビロンの神が拝まれていることが書かれています。イシュタルは、「天の女王」として現れます。



この母と子の原型が、カナンではアシュタロテとタンムズになっています。エジプトでは、女神イシスがいて、その息子がホルスです。ギリシアでは、アフロディテとその息子エロスです。そして、ローマは、ウェヌスあるいはビーナスと、クピドあるいはキューピッドです。トルコでは、キュベレーという女神がいます。日本では、もちろん天照大神です。なぜか男性であるはずの仏陀は、観音像では母の様相を帯びていますね。バビロンの宗教の影響がどれだけ大きいか分かります。そして、ローマ・カトリックのマリアとイエスの絵画や像は、バビロン神話の反映を思わざるを得ません。

2C 淫婦を食らい焼き尽くす獣 16-17

¹⁶ あなたが見た十本の角と獣は、やがて淫婦を憎み、はぎ取って裸にし、その肉を食らって火で焼き尽くすことになります。

ここは、注意して目に留めるべき出来事です。獣という権力者でさえ、この女の下にいました。女の中で権力者は生きていたのです。宗教と富と、それから政治が密着しています。しかし、そうした甘い汁を吸っている、金の杯をもって巨額の富を王たちから得ている女は、ついに憎まれます。自分たちが利用していれば、ついに憎まれ、滅ぼされるのです。

¹⁷ それは、神のことばが成る時まで、神はみこころが実現するように王たちの心を動かし、彼らが一つ思いとなって、自分たちの支配権を獣に委ねるようにされたからです。

² https://x.com/cho_inoshikacho/status/1108965813845786626/photo/1

ここに、神の深淵な御心があります。大淫婦を滅ぼすことは、主の御心です。それで、獣と王たちが彼女を憎むことにおいて一つになっているのを利用されて、大淫婦を滅ぼすようにされるのです。しかし、彼ら自身も、獣を神としてみがめ、そして神とキリストに反抗する時に、徹底的に滅ぼされるのです。主は、悪を裁くために、悪者もさばかれることがあります。ユダを裁くために、バビロンを利用されました。しかし、それは彼らを正当化しません。バビロンも徹底的に裁かれます。

このようにして見えてくるのが、獣の国です。バビロンを利用せずして、そのまま獣を像として捧げ、政治経済、宗教の完全な一体化を図るのです。

3C 王たちを支配する大きな都 18

¹⁸「あなたが見たあの女は、地の王たちを支配する大きな都のことです。」

ここで御使いが、はっきりと大淫婦が大きな都であると言っています。この都の倒壊を、18章で主は生々しくお見せになります。

こうしてバビロンは、ニムロデが建てたバベルから始まり、その後の大国の歴史の中でずっと影響力を及ぼしていました。ネブカドネザルのバビロンが、国々を征服し、世界に君臨した都としても現れました。ローマ時代のローマも、国々を征服した後の都の中に、露骨に現れました。そして今も影響力を及ぼしています。そして終わりの日にも顕著になる都があります。

そして女は、世に組み込まれた宗教の行く末がよく表れています。富や力を持っている教会は、どんなに大きく見えても過ぎ去ります。真実な教会派、キリストによって召され、選ばれ、忠実な者たちによって構成されます。私たちは、神を愛する者か、世を愛する者かが問われます。「ヤコブ 4:4 節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。」神を愛するか、世を愛するかのどちらかしかできません。